

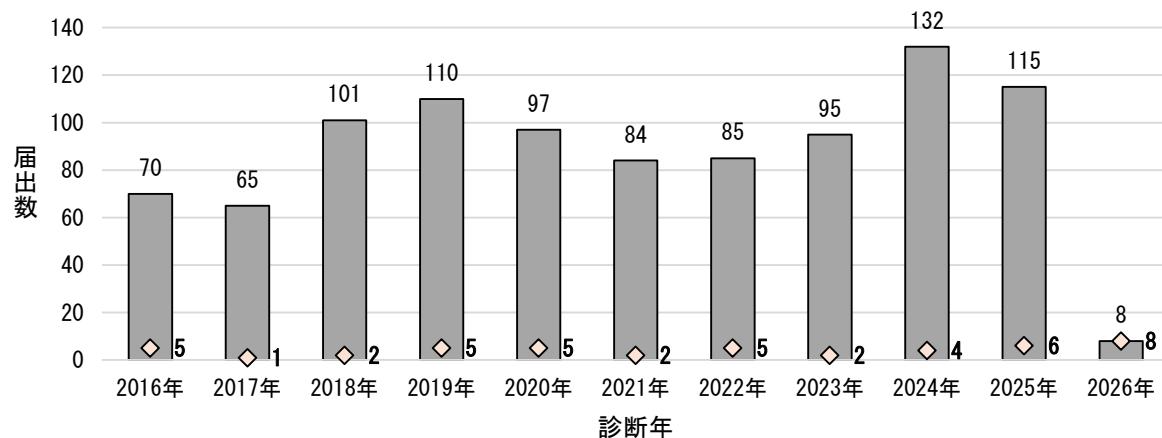
【今週の注目疾患】

《レジオネラ症》

2026年第3週に県内医療機関から4例の届出があり、第3週時点の累計は直近10年で最も多い8例となった（図1）。

図1:2016年から2026年第3週までの県内のレジオネラ症診断年別届出数

(2026年第3週時点, n=962) □年間累計届出数 ◇第3週時点届出数



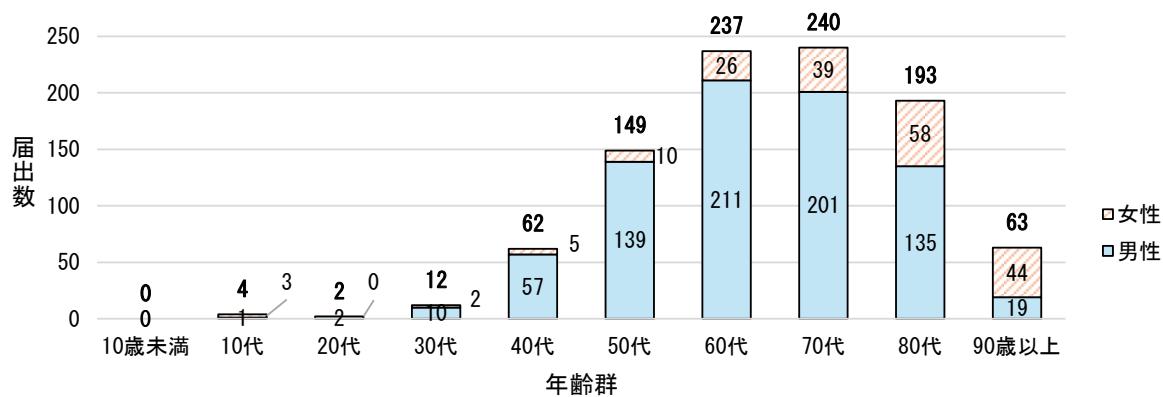
2016年から2026年第3週までに県内医療機関から届出のあった962例の概要は以下のとおり。

病型別では、肺炎型910例（95%）、ポンティアック熱型41例（4%）、無症状病原体保有者11例（1%）であった。性別では、男性775例（81%）、女性187例（19%）と男性が約8割を占めた。年代別では、70代が240例（25%）と最も多く、次いで60代237例（25%）、80代193例（20%）であり、60歳以上が7割以上（733例）を占めた（図2）。推定される感染原因・感染経路（重複あり）は、水系感染（エアロゾル感染を含む）262例（27%）、塵埃感染66例（7%）であった。

肺炎型910例の届出票に記載のあった症状・所見（重複あり）は、肺炎889例（98%）、発熱821例（90%）、咳嗽350例（39%）、呼吸困難323例（35%）、意識障害130例（14%）、下痢86例（9%）、多臓器不全83例（9%）、腹痛23例（3%）であった。

図2:2016年から2026年第3週までの県内のレジオネラ症年齢群別届出数

(2026年第3週時点, n=962)



レジオネラ症は、土壤や水環境に広く存在するレジオネラ属菌による細菌感染症であり、主な病型として重症の肺炎を引き起こすレジオネラ肺炎と、一過性で自然に改善するポンティック熱がある¹⁾。

レジオネラ肺炎の潜伏期間は2日から10日で、全身倦怠感、頭痛、食欲不振、筋肉痛などの症状に始まり、咳や38°C以上の高熱、寒気、胸痛、呼吸困難、下痢などの症状を呈する。また、意識レベルの低下、幻覚、手足が震えるなどの中枢神経系の症状を伴うこともある。特に高齢者、大酒家、喫煙者、透析患者、移植患者や免疫機能が低下している人もレジオネラ肺炎のリスクが高いとされている^{1,2)}。

ポンティック熱の潜伏期間は1日から2日である。突然の発熱、悪寒、筋肉痛で始まるが、一過性で治癒する^{1,2)}。

感染経路としては、エアロゾルを発生させる環境（循環水を利用した風呂、加湿器、噴水等の水景施設、空調設備の冷却塔等）を感染源とするエアロゾル感染、温泉浴槽水や河川の水を吸引・誤嚥したことによる感染、汚染された土壤の粉塵を吸い込んだことによる塵埃感染などがある^{1,2)}。

対策としては、追い炊き機能付きの風呂や24時間風呂などの循環式浴槽を備え付けている場合には、配管や浴槽内に汚れやぬめり（バイオフィルム）が生じないよう定期的に清掃を行うなど、取扱説明書に従って維持管理をすることが重要である。また、超音波振動などの加湿器を使用する時には、毎日水を入れ替えて容器を洗浄することが大切である¹⁾。エアロゾルが発生する高圧洗浄や、粉塵が発生する腐葉土の取り扱い等にあたってはマスクを着用して感染を予防していただきたい²⁾。

■参考・引用

1)厚生労働省：レジオネラ症

https://www.mhlw.go.jp/stf/newpage_00393.html

2)国立健康危機管理研究機構：レジオネラ症

<https://id-info.jihs.go.jp/diseases/ra/legionella/index.html>